

## 使徒の働き7章54－60節 「殉教の心構え」

### 1A 罪を明らかにされる方 54

### 2A 聖霊による望み 55－56

#### 1B 天の栄光 55

#### 2B 神の右に立たれる方 56

### 3A 一斉に反抗する人々 57－58

#### 1B 聞きたくない真理 57

#### 2B 上着の番をするサウロ 58

### 4A 主に倣う弟子 59－60

#### 1B 息の引き取り 59

#### 2B 赦しの祈り 60

## 本文

使徒の働き7章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、6章まで来ました。午後の礼拝で、7章全体を一節ずつ見ていきたいと思います。今朝は、最後の部分、54節から60節の部分に注目したいと思います。まず、本文をお読みします。「<sup>54</sup>人々はこれを聞いて、はらわたが煮え返る思いで、ステパノに向かって齒ぎしりしていた。<sup>55</sup>しかし、聖霊に満たされ、じっと天を見つめていたステパノは、神の栄光と神の右に立っておられるイエスを見て、<sup>56</sup>「見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます」と言った。<sup>57</sup>人々は大声で叫びながら、耳をおおい、一斉にステパノに向かって殺到した。<sup>58</sup>そして彼を町の外に追い出して、石を投げつけた。証人たちは、自分たちの上着をサウロという青年の足もとに置いた。<sup>59</sup>こうして彼らがステパノに石を投げつけていると、ステパノは主を呼んで言った。「主イエスよ、私の霊をお受けください。」<sup>60</sup>そして、ひざまずいて大声で叫んだ。「主よ、この罪を彼らに負わせないでください。」こう言って、彼は眠りについた。」

今朝は、殉教について見ていきたいと思います。私たちは教会で、「奉仕者の心構え」という言葉を標語にして、教会に仕え、主ご自身に仕える姿勢を学んでいます。主に仕えている姿、主に献身している姿は、とても美しいですね。一度、フェイスブックで、日本のカルバリーチャペルの牧師の奥さんたちの集会があって、その集団写真を誰かが掲載していました。何と美しいことか、と思いました。それは容姿の美貌とか、そういうものではありません。むしろ、多くの労苦で疲労感さえ見える様子もあります。けれども、主に仕えている方々は、肉体的に弱くなったとしても、そこに麗しさを感じることができます。

けれども、殉教は、麗しさを越えて栄光の輝きがあります。殉教ですから、無残な死に方をして

います。毎日のように、世界各地で今も、殉教した聖徒たちのニュースが入ります。時々、その死んだ後の姿も出てきます。その肉体は損傷を受けています。目を背けたくなるような酷い状態の時もあります。けれども、何かどこかで輝いています。その抜け殻のように置かれた体が、死ぬ直前に、天使か誰かが触れたのではないか？と思われるような、神の栄光の息吹きが漂っています。「I ペテ 4:14 もしキリストの名のためにののしられるなら、あなたがたは幸いです。栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にもとどまってくさるからです。」

殉教というのは、神が福音宣教のご計画を立てている中で、中核にあると言っても過言ではないでしょう。主ご自身が、その告白のゆえに迫害を受け、死なれました。それに続く聖徒たちも信仰による死を遂げました。教会史は、流された血なくして語ることはできません。それは過去の出来事ではなく、現在進行形の出来事でもあります。日本においては、死ぬことはないのかもしれませんが、しかし、心構えを語るのは、私たちの信仰の中心的部分になっているからです。使徒の働き 1 章 8 節にて、イエス様が、聖霊が私たちに臨まれたら、力を受ける。そして、イエス様の証人となると約束されました。その「証人」という言葉のギリシア語は、マルトユス μάρτυς と言います。これは、英語では殉教者(martyr)の意味になっています。主イエス・キリストを証しするということには、その告白のゆえ、死を帯びているのだということを知るべきですね。

#### 1A 罪を明らかにされる方 54

<sup>54</sup> 人々はこれを聞いて、はらわたが煮え返る思いで、ステパノに向かって歯ざりししていた。

これは、ステパノの説教を聞いた人々の反応です。「はらわたが煮え返る思い」というのは、日本語訳として、とても表現豊かだと思います。ギリシア語の直訳は、「心をのこぎりで切り取られる」というものです。ステパノの説教は、彼らの聞きたくないこと、最も嫌なことを、真っ直ぐに伝えるものでした。自分たちは、先祖たちを誇り、モーセの律法を誇っていましたが、ステパノは、先祖たちこそが、神から遣わされた者たちをことごとく拒み、モーセの律法をことごとく破ってきたのだと糾弾したのです。それを、彼らの誇る父祖アブラハムから、ヨセフ、モーセ、そしてダビデとソロモンに至るまで、淡々と、聖書からイスラエルの歴史を紐解きながら、説き明かしていきました。

ステパノの説教が、聖霊と知恵とに満たされていることを思い出してください。6 章 10 節に、「彼が語る時の知恵と御霊に対抗することができなかった。」とあります。聖霊が、世に対して誤りを明らかにする方であることを、主は語られましたね。「ヨハ 16:8 その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世の過りを明らかにしてくださいます。」聖霊の働きによって、神の真理が明らかにされ、自分の隠れた暗闇も明らかにされるのです。

強い罪の自覚を聖霊は下さるのですが、悔い改める心には、その言葉はかえって傷の癒しになります。ペテロも基本的に、「あなたがたが十字架につけたのです」と真っ直ぐに語って、それを聞

いていたユダヤ人たちは、「2:37 心が刺され」とあります。けれども、どうしたらよいのかと尋ねました。ペテロは、「2:38 それぞれ罪を赦していただくために、悔い改めて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。」と言いました。悔い改める、へりくだった心には神の憐れみと、罪の赦しを与えられますが、頑ななままにしていると、それは、のこぎりで心が切り取られる思いになるのです。

ところで、イエス様は前もって、こういうことが起こることを弟子たちに話しておられました。「ルカ 21:12-15 しかし、これらのことすべてが起こる前に、人々はあなたがたに手をかけて迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために、あなたがたを王たちや総督たちの前に引き出します。13 それは、あなたがたにとって証しをする機会となります。14 ですから、どう弁明するかは、あらかじめ考えない、と心に決めておきなさい。15 あなたがたに反対するどんな人も、対抗したり反論したりできないことばと知恵を、わたしが与えるからです。」ステパノは、イエス様が前もって伝えておられたように、最高法院に連れてこられたことを、イエス様を証しする機会と捉えたことでしょう。そして、その時に、だれも対抗したり、反論できない知恵を主が下さると信じていたことでしょう。

しかし、それだけではありません。そのために憎しみを買い、殺されることも覚悟していたと思います。主が続けてこう教えておられたからです。「21:16-19 あなたがたは、両親、兄弟、親族、友人たちにも裏切られます。中には殺される人もいます。17 また、わたしの名のために、すべての人に憎まれます。18 しかし、あなたがたの髪の毛一本も失われることはありません。19 あなたがたは、忍耐することによって自分のいのちを勝ち取りなさい。」主の証しを立てることによって、憎まれて、殺されるかもしれない。けれども、最後まで忍耐すれば、主は必ず救ってくださる。つまり、主のおられるところに自分が行くことができると思ったことでしょう。迫害や殉教の心得というのは、こうやって主の前もって語られたことばをよく考え、そこから目を離さないことです。

## 2A 聖霊による望み 55-56

<sup>55</sup> しかし、聖霊に満たされ、じっと天を見つめていたステパノは、神の栄光と神の右に立っておられるイエスを見て、<sup>56</sup>「見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます」と言った。

## 1B 天の栄光 55

「しかし」という接続詞から始まります。対比しているのです。一方で、最高法院の議員たちや、それを聞いていた民衆は、心がのこぎりで切り取られるような思いがして、歯ぎしりしていましたが、しかし、ステパノ自身は平安に満ちていました。6章の終わりにあるように、「御使いの顔」のようになっていたというのです。その秘訣は、「聖霊に満たされ」ていた、ということです。私たちは、どれだけ、聖霊の満たしが必要でしょうか？主が何度となく、聖霊を受けることを求めなさいと語っておられたでしょうか。聖霊によって、このような恐ろしい状況の中でも、なおのこと希望があるのです。

ローマ 15 章 13 節で、聖霊の力によって平安と、希望に満ちることができることを話しています。「どうか、希望の神が、信仰によるすべての喜びと平安であなたがたを満たし、聖霊の力によって希望にあふれさせてくださいますように。」

## 2B 神の右に立たれる方 56

そして、ステパノがこのような恐ろしい状況の中で、なおのこと平安と喜びがあったのは、天におられるイエス様の姿を見たからです。「**神の栄光と神の右に立っておられるイエスを見て**」と言っています。しかも、その時に、「**天が開け**」たのです。苦難がある時に、主は天の幻をお見せになることが分かります。「ロマ 5:2-3a このキリストによって私たちは、信仰によって、今立っているこの恵みに導き入れられました。そして、神の栄光にあずかる望みを喜んでいますが、それだけではなく、苦難さえも喜んでいきます。」そして、パウロはこうも言いました。「8:18 今の時の苦難は、やがて私たちに啓示される栄光に比べれば、取るに足りないとは私は考えます。」後に来る栄光、天における神の栄光を見るならば、差し迫る苦しみは取るに足りないということです。

預言者イザヤが、墮落したユダの国とエルサレムの都を見て、落胆していたことでしょう。そして、有能なウジヤ王が死んでしまいました。その時に幻を見たことを思い出してください(6 章)。黙示録では、パトモス島に流刑になっていたヨハネが、天が開けて、栄光の神と子羊の幻を見たことを思い出してください。苦しみにある神の栄光の幻です。

そして、ここで、ステパノは驚くべき姿を見ます、「**神の右に立っておられるイエス**」なのです。キリストが天において、神の右に座しておられることを、イエス様ご自身が、ダニエルの預言を取り上げて、ご自分がそれであることを告白されていました。「ルカ 22:67-69 「おまえがキリストなら、そうだと言え。」しかしイエスは言われた。「わたしが言っても、あなたがたは決して信じないでしょう。わたしが尋ねても、あなたがたは決して答えないでしょう。だが今から後、人の子は力ある神の右の座に着きます。」この告白で、主は死刑宣告を大祭司カヤパから受けました。そして今、ステパノもイエスがキリストとして神の右におられることを告白し、それで人々から殺されます。

事実、主は今、神の右の座におられます。「ロマ 8:34 だれが、私たちを罪ありとするのですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、しかも私たちのために、とりなしてくださるのです。」復活され、陰府にいる聖徒たちを引き連れ、天に入られて、そして神の右の座に着かれました。

しかし、ここで驚くべきことは、主が座っているのではなく立たれていることです。詩篇 110 篇においては、主が敵を足台とするまでは、座っていないと命じられている場面があります。つまり、主が国々を裁かれるために再び戻ってこられる時は立ち上がります。しかし、それではありません。殉教者を受け入れる時に立ち上がってくださるのです。主の名のゆえに最後まで耐え忍ぶ者たち

には、このように天の栄光をここまでかというばかりにお見せになるのです。私たちは、迫害や殉教と聞けば、自分はそのような状況において耐えられるのか？と心配してしまうかもしれません。けれども、ステパノのように、殉教者たちには、これまでにない栄光を、イエス様が受け入れてくださるという確証が与えられるほどなのです。

### **3A 一斉に反抗する人々 57-58**

#### **1B 聞きたくない真理 57**

**57 人々は大声で叫びながら、耳をおおい、一斉にステパノに向かって殺到した。**

これは、何と云ったらいいのでしょうか、「真理を嫌というほど知ってしまったけれども、それでも拒む」姿勢と言ったらよいでしょう。ステパノが言っていることが気に喰わなければ、ただ無視すればよいだけのことです。けれども、大声で叫び、耳を覆っているということは、それが真理だと分かっているから、それで反発しているのです。反論も何もできないと分かった今、彼らがすることは大声で叫ぶこと、そして耳を覆うこと、そして、ステパノを殺すことです。真理をここまで頑なに拒む人たちのことについて、イエス様は山上の垂訓でこう言われましたね。「マタ 7:6 聖なるものを犬に与えてはいけません。また、真珠を豚の前に投げてはいけません。犬や豚はそれらを足で踏みつけ、向き直って、あなたがたをかみ裂くこととなります。」

#### **2B 上着の番をするサウロ 58**

**58 そして彼を町の外に追い出して、石を投げつけた。証人たちは、自分たちの上着をサウロという青年の足もとに置いた。**

神殿の敷地で人を殺すことはできません。それで町の外に追い出しています。これもまた、イエス様が受けた仕打ちに似ています。主が死なれたのは、エルサレムの町を出たところです。今、エルサレムの旧市街に入る門の一つに、「ステパノ門」と呼ばれるものがあります。オリーブ山からケデロン谷を経て、そして坂を上るとそこがステパノ門です。入ると、左手には神殿の丘があり、右にはベテスダの池の跡があります。そして、そこをまっすぐに行くと、ヴィア・ドロローサと呼ばれる、主の受難の道です。言い伝えによれば、神殿の敷地にいたステパノが、この門から外に引きずり出されたと言われています。

そして、当時の石打ちの仕方ですが、崖にまで連れていかれます。着ている物ははぎとられます。そして、証人がその人を崖の下に突き落とします。ステパノの場合は、もちろん偽の証言をした本人です。そして、他の証人が石を投げます。そして、群衆が投げます。ここで、サウルが上着を管理していますね。それは、上着を脱ぐことによって、石を投げる時に、腕が自由になるので命中することができやすくなるためです。

ついに、ここにパウロの姿が出ます。彼の元々の名前はサウロでした。青年とありますが、おそらくは30歳前後だったでしょう。彼は、自分の師匠がガマリエルだったのですが、彼の提案には不服だったと考えられます。8章には、彼が気違いになったかのように、迫害をしていきます。それは、彼の良心に、ステパノの証しが入ってきてしまったからです。彼の言っていることは、確かに正しいと分かっているのです。それを拒んでいるので迫害が激しくなるのです。反発する魂は、しばしば、砕かれやすいと言われます。ガラスは割れるが、ゴムは砕かれることはありません。

#### 4A 主に倣う弟子 59-60

##### 1B 息の引き取り 59

**59 こうして彼らがステパノに石を投げつけていると、ステパノは主を呼んで言った。「主イエスよ、私の霊をお受けください。」**

ステパノは、最後の最後まで主を見つめていました。天におられるイエスを見つめていただけでなく、十字架で死なれる直前の主を思い出していました。主は大声で叫んで、「ルカ 23:46 父よ、わたしの霊をあなたの御手にゆだねます。」と言われていたのです。主は父なる神に祈られました。が、今、ステパノは主ご自身に、同じことを話しています。霊をまかせるということです。

##### 2B 赦しの祈り 60

**60 そして、ひざまずいて大声で叫んだ。「主よ、この罪を彼らに負わせないでください。」こう言って、彼は眠りについた。」**

なんと優れた言葉でしょうか！これもステパノは、主ご自身の祈りを知っていたからこそ、こうやって祈っているのです。イエス様は十字架上で、「ルカ 23:34 父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。」このようにして、彼らはとてつもない大きな罪を犯しているのですが、それを彼らに負わせることのないようにと祈っているのです。この祈りは聞かれました、神の怒りを受けなければいけない迫害者パウロが、悔い改め、主イエスを信じて、福音を伝えるようになりました。このように、最後の最後まで主から目を離さなかったのです。

そして最後に、「**彼は眠りについた**」とあります。これは、彼が文字通り眠った、ということではありません。ヨハネ 11章で、ラザロが死にかけていることを、マルタとマリアがイエス様に使いを送り伝えましたが、そこになお二日とどまりました。そして、ラザロは眠っていると言われたら、「では、また起きる」と答えた弟子に対して、「ラザロは死にました。」とはっきり告げています。会堂司ヤイロの娘が死んだ後に、「眠っている」と主が言われたら、嘲られました。テサロニケ第一 4章にも、「眠っている人たち(13節)」とあります。それは、死んでも必ず復活するからであり、死は永遠ではなく一時的なものだということです。死で終わるのではないということです。

ですから、殉教する人には、命の希望があります。ステパノの意味は、「冠」の意味を表しますが、黙示録 2 章に、スミルナの教会の人たちが主のゆえに殺されそうになっていた時に、イエス様が約束されました。「2:10 死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与える。」死んでもよみがえるから、いのちの冠です。

ここで私たちは、再び問わないといけません。証しをしていますか？ということです。証しをすることは、暗闇に光を灯すようなものです。反発が来ます、けれどもそれを甘んじて受けるというところに、聖霊の満たしがあります。どんな反対にあっても、それでも喜びと平安で守ってくださり、天の栄光を見させてくださいます。